那須塩原「なじみ庵」

「地域福祉の拠点」閉所

高齢者が支え合い10年

ハーモニカサークルの演奏を聞き、名残を惜しむ「なじみ庵」の利用者たち

【那須塩原】市内のＮＰＯ法人ゆいの里が運営する太夫塚１丁目の「街中サロンなじみ庵」が31日、閉所した。2005年11月に開所。高齢者らが持っている力を生かし、支え合う先駆的な取り組みは全国的に注目を集めた。当初から10年間の構想で、一定の成果を挙げたことから区切りをつけた形。飯島恵子同法人代表（61）は「地域や高齢者の持っているもったいない力を生かした居場所づくりの一つとしての可能性は示せたと思う。ここを体験した人が次につないでくれれば」と話している。（樺沢修）

一定の成果、活動に区切り

なじみ庵は、街なかの空き店舗を利用。「市街中サロン事業」の補助を受け、食堂と工房を運営してきた。65歳～90代の会員はケアされる人ではなく支え合う存在。食堂の調理、全国的にまれな無料送迎の運転も高齢者がボランティアで担った。

会員が作った歌、体操を取り入れた介護予防教室も充実。要支援、要介護の人も会員として受け入れてきた。スタッフが目を配り、地域包括支援センターとの連携や必要に応じ医療・介護につないだ。

ゆいの里は、１９９６年の開設当初から街なかの居場所づくりに取り組んできた。高齢者ばかりでなく障害者、不登校の児童ら居場所の必要な人の共生の場づくりも目指してきた。なじみ庵も児童らの集いの場として機能したが開所時間や店舗スペースの課題から縮小した。

31日は多くの会員が集い、最後の「おふくろの味ランチ」を味わった。会員女性（84）は「年を取れば取るほどなじんだ人のところがいい。名残惜しい」と閉所を残念がった。介護予防教室などに参加した会員有志は4月以降週2回、市健康長寿センターに集う。

飯島さんは「介護保険に頼らない居場所づくりをとやってきた。歩いて行けるところに高齢者の力を生かした気軽な居場所が必要。なじみ庵の種があちこちで芽を出すことを期待している」と話した。